

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03412

研究課題名(和文) 多言語社会パラオにおける実時間調査 20年後の経年変化

研究課題名(英文) Real-time studies of multilingual Palau: Language change over 20 years

研究代表者

松本 和子 (MATSUMOTO, Kazuko)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80350239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では多言語社会パラオにおいて見かけ上の時間に加え、多様な実時間の分析手法を駆使し、多角的な視点から経年変化を調査考察した。20年後に追跡調査を行い、1997-1998年に収集したデータを基に開始した3つの研究プロジェクト (1)多言語社会パラオのダイグロッシアの変遷、(2)パラオ語の借用語に関する意識、尺度、意味変化、(3)コロニアル・コイナーとしてのパラオ日本語の形成と消滅の研究結果を再考した。複数の種類の実時間の分析手法を用いることで、本研究は現在主流を成している見かけ上の時間を用いた分析の妥当性を検証し、社会言語学研究の方法論の議論に寄与することができたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまで実時間調査があまり行われてこなかった多言語社会において、ダイグロッシアや借用語、接触言語の研究に実時間調査を採用するという極めて前例の少ない斬新な事例を提供することができたと考える。またパラオ日本語のデータは言い換えれば日本統治時代を知る高齢者からの口述記録でもあるため、言語学研究のみならず歴史研究分野への貢献にも繋がる。戦争体験の風化が叫ばれる今日において、戦争体験の次世代への継承を図ることで一般社会に対して大きな貢献になりうると考える。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to explore the way in which multilingualism in Palau has evolved over time by reinvestigating the same community two decades after my initial research. In recent years variationist sociolinguists have increasingly conducted real-time studies of language change in monolingual communities. Given the rarity of this approach in the study of societal multilingual communities, this research project was methodologically motivated to fill a gap by reassessing multilingualism in postcolonial Palau.

The restudy conducted in 2017-2018 provides real-time evidence to assess the direction and progress of change in multilingualism in Palau where diglossia continues to remain stable owing to the unpopularity of written Palauan. Real-time analysis of Palauan Japanese and Palauan English Corpora highlights the discontinuum between once vibrant postcolonial Japanese and formally learnt contemporary Japanese, and the emergence of a highly localised variety of English.

研究分野：社会言語学

 キーワード：diglossia colonial koine feature pool immigrant koine ダイグロッシア コロニアル・コイナー
 - フィーチャー・プール 移民コイナー

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

パラオ共和国はスペイン、ドイツ、日本、米国による1世紀におよぶ統治を経て独立を果たし、パラオ語はもとより、日本語、英語などの複数の言語が複雑に入り混じった国家であるため、多言語社会における「ダイグロッシア(diglossia)」、接触言語や借用語の盛衰・変容などを調査する上で最適な地域の一つであると考えられる。そのため研究代表者は1997年より継続的にパラオで言語調査を行い、多様な角度から多言語社会における言語変化のメカニズムの解明に努めてきた。

初めてパラオの研究に着手した当初は先行研究が皆無であったことから、まずはパラオの多言語状況を把握する目的で予備的調査を実施した。233名のパラオ人各世代にパラオ語、日本語、英語、借用語、コード・スイッチングの使用、能力、意識などに関してインタビューおよびアンケート調査を実施し、「見かけ上の時間(apparent-time)」を用いた分析を行った。ダイグロッシアに関する考察では、「高位言語(high language)」の日本語から英語への交代、パラオ語の「低位言語(low language)」としての定着を実証するとともに、今後の多言語社会の変化の方向性を3段階で提示した。具体的には、①三言語使用社会から二言語使用社会への移行、②エリート英語話者と一般パラオ語話者が共存するダイグロッシア状況の継続、③英語の普及によって将来的にはパラオ語が駆逐され英語に支配される可能性を示唆した。詳細は Matsumoto (2001) 「Multilingualism in Palau: Language contact with Japanese and English」を参照されたい。

同データを基にした日本語由来の借用語およびパラオ語と英語のコード・スイッチングへの意識に関する考察では、多言語社会であるパラオでは一般的に規範意識が高いとされる中年層を除いて「言語純粋主義(linguistic purism)」者は少数派であり、パラオ語に日本語や英語などの外来言語要素が混入することへの肯定的な態度が示された。こうした「見かけ上の時間」を用いた考察結果より、今後も日本語からの借用語や英語へのコード・スイッチングは継続されるという方向性を予測した。詳細は上記 Matsumoto (2001); 松本(2010)「ミクロネシアの日本語」を参照されたい。

同じく同データ(とりわけインタビューデータ)を基にしたパラオの接触日本語変種の形成と消滅に関する考察では、日本のかつての「南洋群島」の本部「南洋庁」が設置されたパラオでは、戦前、パラオ人を遙かに上回る大量の邦人移民がもたらした日本語の諸方言が接触し、さらにパラオ語との接触も加わりながら接触日本語変種が形成されていったことを実証し、これが「コロニアル・コイネー(colonial koine)」と分類されることを実証した。さらに「見かけ上の時間」を用いて、現在は消滅に向かっていることも実証的に提示した。詳細は Matsumoto and Britain (2003), Matsumoto (2011, 2013), 松本(2013)を参照されたい。

一方、社会言語学分野における言語変化の研究は、これまで上記の「見かけ上の時間」を用いた分析手法が主流を成してきた。これはある地域で一時点において、異なる年齢層の話者からデータを収集し、そこで観察される世代間の差違を变化の指標と見なす手法である。一時点でデータの収集と分析を行えるという利便性があるだけでなく、現在進行中の変化を捉え、その諸要因を考察できるという分析上のメリットもある。しかし、この手法は若年層が幼少期に習得した言語使用中高年齢層になっても保持するとの「仮説」をもとに、若年層の言語使用を言語変化の向かう方向として捉えるものであり、この仮説の信頼性をめぐる議論も浮上している。

近年、この仮説に頼らず、時間の経過とともにある言語が変容していく過程を調査する研究が増加しつつある。これは「実時間(real-time)」と呼ばれる分析手法で、ある地域で反復的な調査を行い、連続的に言語の変容を追跡調査する方法である。見かけ上の時間を用いた分析に比べ、現実の変化の方向性と進度を観察できることが利点として強調されている。だが、実時間を用いた分析はサンプリング方法、話者の属性の分布、データの種類、収集法などが統一されて初めて意義のあるものとなる。再調査において前回と同じものを再現することが非常に困難であること、またデータ収集の完成までに10年、20年と長い年月を要することなどから、実時間を用いた分析はこれまで希少なものとされてきた。

しかし社会言語学が1960年代に誕生してから半世紀が過ぎる今、調査者自身がかつての調査地へ足を運び、数十年後に再調査を行うことで、前回の見かけ上の時間を用いた分析によって得られた研究結果の妥当性を検証しようとする動きがある。しかしながら、これまでこうした検証は単一言語社会における方言の変容に関する研究に限定され、多言語社会におけるダイグロッシアや接触言語、借用語に関する研究では採用されていない。

2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、本研究では多言語社会パラオにおいて従来の見かけ上の時間に加え、多様な実時間の分析手法を駆使し、多角的な視点から経年変化を調査考察していく。具体的には、20年後に当たる2017-2018年に再度パラオへ渡り追跡調査を行うことで、1997-1998年に収集したデータを基に開始した3つの研究プロジェクトー(1)多言語社会パラオのダイグロッシア

シアの変遷、(2)パラオ語の借用語に関する意識、尺度、意味変化、(3)コロニアル・コイナーとしてのパラオ日本語の形成と消滅—の研究結果を再考する。こうした複数の種類の実時間の分析手法を用いることで、本研究は多言語社会における言語変化のメカニズムの解明を前進させるとともに、現在主流を成している見かけ上の時間を用いた分析の妥当性を再考し、社会言語学研究の方法論の議論に寄与することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 多言語社会パラオのダイグロッシアの変遷

本プロジェクトでは 20 年後にあたる 2017-2018 年に再度パラオへ足を運び追跡調査を行う。実時間調査にはいくつかの手法があるが、本プロジェクトでは Trudgill (1988) が用いた手法に倣い、20 年前には調査対象から外れた未就学児童やまだ生まれていなかった話者 70 名からデータを収集する。これにより、①かつての見かけ上の時間調査と繋ぎ合わせ、分析対象期間を 80 年間から 100 年間へと拡張させ、一世紀におよぶパラオの多言語化の変遷を展望するとともに、②20 年前の見かけ上の時間分析が予測した 3 段階の変化の方向性と進捗が 20 年後に収集した新たなデータによって支持されるかどうかを検証し、社会言語学研究の方法論の議論に寄与することを目指す。

(2) パラオ語の借用語に関する意識、尺度、意味変化

本プロジェクトでは、20 年前の見かけ上の時間の分析結果の妥当性を実時間調査で検証するとともに、2 つの視点から借用語の意味変化を考察する。まずは「起点言語(source language)」であるスペイン語、ドイツ語、日本語、英語における元来の意味や品詞が「受容言語(recipient language)」であるパラオ語においてどのように変容しているのかを考察する。次に「食」に関する借用語の使用の有無・意味・使用法などを 4 つの世代に聞き取り調査を行い、見かけ上の時間調査を用いて借用語の意味変化および衰退を考察する。

さらに借用語の理論構築にも資するため、借用語の研究分野では世界各地で様々な言語の組み合わせで検証が進められている理論的枠組み「借用語の尺度(borrowing scale)」を用いて考察を行う。Matsumoto (2010) 「Palauan language contact and change: A sociolinguistic analysis of borrowing in Palauan.」では、オリジナルの 5 つの尺度(Thomason and Kaufman 1988)を基にした分析を行ったが、本プロジェクトでは改訂された 4 つの尺度(Thomason 2001)を用いて、パラオ語と各宗主国の言語との当時の接触の度合いが借用語の浸透度合い・種類と合致するかどうかを再検証する。

(3) コロニアル・コイナーとしてのパラオ日本語の形成と消滅

パラオの日本語に関しては、その後も数年おきに反復的な調査を行い、時間の経過とともに日本語変種がどのように変容し消滅していくのかを観察するためのデータの収集を続けている。現在のパラオでは日本統治時代を知る高齢層の多くがすでに他界しており、計画通りにデータ収集を行うことは困難な状況ではあるが、本プロジェクトにおいても一人でも多くの「最後の話者(last speakers)」となり得る高齢層より新たな談話データを入手し、同一地域の同一世代を再調査する「トレンド調査(trend study)」、同一地域の同一被験者を追跡調査する「パネル調査(panel study)」と呼ばれる 2 つの種類の実時間の分析手法を用いた言語消滅の研究を展開する。

さらに方言接触・言語接触の理論構築にも寄与するため、「コイナー化のプロセス(processes of koineization)」(Trudgill 1986, Britain 2018)、「創始者効果(Founder Principle)」(Mufwene 1996)、「フィーチャー・プール(feature pool)」(Mufwene 2001, 2008)、「植民地遅滞(colonial lag)」(Trudgill 2004)などを分析の枠組みとして引き続き採用し、理論検証も行っていく。

(4) 他の多言語社会との比較考察

最終年度は総合的・包括的な研究を展開するため、他の多言語社会との対比・比較を行い、パラオの多言語社会の普遍性と個別性を探求するとともに、複数の多言語社会において上記の理論的枠組みを用いた分析を行い理論の有効性・応用性を検証することで理論構築に寄与する。

4. 研究成果

(1) 多言語社会パラオのダイグロッシアの変遷に関する研究成果

多言語社会パラオにおけるパラオ語、日本語、英語の能力に関する分析では、新旧データを繋ぎ合わせ、過去 100 年間の多言語使用の変遷を考察し、他の旧植民地域との比較も行いながら、ダイグロッシアの安定性を検証した。結果は 20 年前に行った見かけ上の時間分析が予測した変化の方向性とほぼ合致することから、見かけ上の時間を用いた分析の有効性を支持するものとなった。さらに独立後 20 年以上が経過したにもかかわらず、新聞におけるパラオ語使用の容認

度は低く、依然として低位言語として存続していることから、Ferguson (1959)の唱える「ダイグロシアの安定性」を支持する結果となった。こうした成果は論文「A restudy of postcolonial Palau after two decades: Changing views of multilingualism in the Pacific」としてまとめ、国際ジャーナル『Journal of Asian Pacific Communication』の30周年記念特集号「Developments in diglossic settings in the Asian Pacific region」で採択されたところである。

(2) パラオ語の借用語に関する研究成果

借用語に関しては2つの論考をまとめ国際的な編著書に収録された。まず一つ目の論考「The role of domain and face-to-face contact in borrowing: The case from the postcolonial multilingual island of Palau」(Matsumoto 2016)では、1997-1998年のデータを基にスペイン語、ドイツ語、日本語、英語由来の借用語の土着化の度合いを言語接触の歴史に照らし合わせ再考した結果、接触が起きた「domain(ドメイン)」に着目することの重要性を明確にすることができた。具体的には、歴史的に最も古いスペイン語由来の語彙の多くはキリスト教に関連するため外来性を有したままである一方で、より新しい日本語由来の語彙は幼児語や感情を表す語彙に浸透した結果、パラオの若年層は土着語由来の語彙であると認識していることを実証した。これまでドメインという概念は多言語社会における言語の住み分けの分析に用いられてきたが、多言語社会が変容する中で借用語として現地語に取り入れられた語彙の研究においても有用であることを指摘したものは管見の限り見当たらない。本研究の成果は今後、借用語の研究に役立つものであると考える。

二つ目の論考「Pancakes stuffed with sweet bean paste: Food-related lexical borrowings as indicators of the intensity of language contact in the Pacific」(Matsumoto and Britain 2019)では、2017-2018年に20代、40代、60代、80代のパラオ人話者より収集したデータに基づき、「食」に関する借用語の使用および意味的バリエーションと変化を考察し、世代間の使用有無の差異および意味の相違を実証した。さらに、新たな「借用語の尺度」(Thomason 2001)を用いてパラオ語と各宗主国言語との接触の度合いが、「食」に関する借用語の浸透度合い・種類と合致するかどうかを検証した結果、大量の邦人移民との濃厚な接触の結果、食に関する借用語のほとんどが日本語由来であること、基礎語彙にまで浸透していることを解明し、当該理論の有効性を実証した。

(3) コロニアル・コイナーとしてのパラオ日本語に関する研究成果

パラオの日本語に関する研究成果は以下3つの国際的な編著書に収録された。①世界のディアスポラ日本語コミュニティの研究を概説した「Japanese in the world: The diaspora communities」、②変異理論を用いた日本語の社会言語学研究を概説した「Language variation and change」、③北西太平洋地域における接触言語変種を概説した「The contact varieties of Japan and the North-West Pacific」という3つの総説論文の中で論及され、『Languages and Communities of Japan』(Oxford: Oxford University Press)、『Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics』、『Routledge Handbook of Pidgin and Creole Languages』(London: Routledge)として出版され、世界に研究成果を発信することができた。

また国内では日本方言研究会第100回研究発表会の記念シンポジウムで登壇し、国内外の接触日本語変種の調査分析手法の相違を議論する機会に恵まれた。パラオ日本語の調査分析手法をまとめた論考「社会言語学の研究動向と方言研究との接点—接触日本語変種の研究を中心に—」が機関誌『方言の研究』の特集号「日本方言研究会の50年を振り返る」で公開された。

最後に、新型コロナウイルス感染の拡大で延期となった3つの国際学会、すなわちNWAV-Asia Pacific 6の基調講演、Sociolinguistics Symposium 23とMethods in Dialectology 18の「パネル調査」に関する国際シンポジウムにて実時間分析を用いた最新の研究成果を公表予定であったが、2021年へ先送りになった。今後こうした成果も国内外で公表していく予定である。

(4) 他の多言語社会との比較考察

4ヵ年計画の最終年度は総括的かつ総合的な分析・研究を展開するため、他の多言語社会との比較研究を織り交ぜ、次なる研究に向けての土台を整備した。具体的には、パラオの研究で用いた3つの理論的枠組みを2つの他の旧植民地域と2つの移民社会に関する予備的研究において採用し、比較分析を行うことで、パラオの多言語社会の普遍性と個別性を探求するとともに、接触社会言語学分野で主要な諸理論の応用性・有効性を検証した。

まず、日本のかつての「樺太」、現在のロシア連邦サハリンにおける借用語の予備的研究では、パラオの借用語の研究と比較を行うため「借用語の尺度」(上記参照)という同一の理論的枠組みを用いた分析を展開した。その予備調査の結果では、当時、邦人移民と接点のなかった大陸出身

のロシア人が人口の圧倒的多数派を占めるようになったサハリンでは、接触度合いおよび日本語由来の借用語の浸透度合いがパラオ語に比べると著しく低いことが示唆された。こうした比較研究から、論文「Japanese and Korean loanwords in a Far East Russian variety: Human mobility and language contact in Sakhalin」(Fajst and Matsumoto 2020)では言語接触の研究において人口移動と接触度合いを探求することが重要であることを指摘した。

次に、韓国併合時に来日し定住した「在日コリアン」(吉田・松本・金 2020, 吉田・松本 2020)、この30年ほどの間に存在感を増している「在日ブラジル人」(松本・奥村 2019, 2020, Matsumoto and Okumura 2020)、トランスナショナルな児童・生徒が集う「ドイツ人学校」(金田・松本 2019)という3つのコミュニティにおいて、パラオの日本語の研究で用いた「コイナー化のプロセス」(Trudgill 1986, Britain 2019)、「創始者効果」(Mufwene 1996)という理論的枠組みを採用した方言接触の予備的研究に着手した。在日コリアンではパラオと同様に20世紀初頭の海外移住によってもたらされた方言接触の結果、すでにコイナーが完成し、現在は消滅に向かっている状態であるが、ブラジル人移民社会やドイツ人学校では現在コイナーが形成されつつある状況であるため、より多様なコイナー化のプロセスを考察できる可能性が示唆された。つまり、近年、実時間調査の増加とともに見かけ上の時間調査の信頼性と限界が議論されているが、本予備調査の結果は、見かけ上の時間を用いた分析には多様なコイナーの形成過程とその諸要因の考察を可能にするという大きなメリットがあることを支持する結果となった。そうした研究成果の一部を論文「在日ブラジル人移民のコイナー形成—方言接触, 創始者効果, フィーチャー・プールの検証—」(松本・奥村 2019)として、国内の社会言語学分野では主要な学会誌『社会言語科学』のなかで公表したところである。

今後はこれまでの研究成果を踏まえ、分析の精度と確度を一層高めながら、引き続き旧植民地域や移民コミュニティにおける言語変化のメカニズムの解明を通じ、社会言語学分野における調査方法論の構築、および言語変異と言語変化の理論の発展へも貢献したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 12件／うち国際共著 6件／うちオープンアクセス 13件）

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 A restudy of postcolonial Palau after two decades: Changing views on multilingualism in the Pacific.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Asian Pacific Communication.	6. 最初と最後の頁 34-59.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1075/japc.00044.mat	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and Akiko Okumura.	4. 巻 14
2. 論文標題 Ecology and identity in koineization: Cake baking in a diaspora Brazilian Portuguese speech community in Japan.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics.	6. 最初と最後の頁 197-244.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.15026/94523	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Fajst, Valeriya and Kazuko Matsumoto.	4. 巻 14
2. 論文標題 Japanese and Korean loanwords in a Far East Russian variety: Human mobility and language contact in Sakhalin.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics.	6. 最初と最後の頁 155-195.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.15026/94522	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 松本和子・吉田さち	4. 巻 14
2. 論文標題 サハリンに関する社会言語学的研究の動向と展望－方言・言語接触の観点より	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニケーション文化.	6. 最初と最後の頁 59-73.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田さち・松本和子	4. 巻 55
2. 論文標題 在日コリアンの方言接触 二世の事例研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学文学部紀要.	6. 最初と最後の頁 203-221.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 巻 34
2. 論文標題 Encountering Micronesia through sociolinguistic fieldwork.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 People and Culture in Oceania.	6. 最初と最後の頁 89-100.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.32174/jsos.34.0_89	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松本和子・奥村晶子	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 在日ブラジル人移民のコイネー形成 方言接触, 創始者効果, フィーチャープールの検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会言語科学.	6. 最初と最後の頁 249-262.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.19024/jajls.22.1_249	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本和子	4. 巻 2
2. 論文標題 社会言語学の研究動向と方言研究との接点 接触日本語変種の研究を中心に (特集「日本方言研究の50年を振り返る」)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 方言の研究.	6. 最初と最後の頁 131-150.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本和子・奥村晶子	4. 巻 44
2. 論文標題 コイナー化における社会的意味と社会階層の役割 日本のブラジルポルトガル語変種の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学会研究大会発表論文集.	6. 最初と最後の頁 78-81.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田さち・松本和子・金廷姫	4. 巻 44
2. 論文標題 在日コリアン二世の方言接触 首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学会研究大会発表論文集.	6. 最初と最後の頁 74-77.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本和子・奥村晶子	4. 巻 1
2. 論文標題 在日ブラジル人コミュニティにおける方言混合とコイナー形成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本地理言語学会大会予稿集.	6. 最初と最後の頁 40-44.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 金田懐子・松本和子	4. 巻 1
2. 論文標題 横浜ドイツ人学校におけるドイツ語の方言接触 スピーチ・アコモデーション理論の検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本地理言語学会大会予稿集.	6. 最初と最後の頁 45-49.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松本和子・奥村晶子・フェイジョーフラビア	4. 巻 43
2. 論文標題 ブラジル移民のコイネー形成 創始者効果と方言接触理論の検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会言語科学会研究大会発表論文集.	6. 最初と最後の頁 34-47.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計43件(うち招待講演 7件/うち国際学会 36件)

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2. 発表標題 Transplanted Japanese as a colonial koine in the Pacific: Dialect and language contact and obsolescence.
3. 学会等名 Keynote lecture at NNAV-Asia Pacific 6. National University of Singapore, Singapore, February 19-22, 2021. (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本和子・奥村晶子
2. 発表標題 方言接触と新方言形成 移民コイネーとしてのブラジルポルトガル語
3. 学会等名 基調講演. 第25回東京大学言語変異・変化研究会(UTLVC25@Komaba). 東京大学. 2020年2月21日. (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2. 発表標題 Substrate 1, SLA nil: The case of -t/d deletion in Palauan English.
3. 学会等名 Invited lecture at Centre for Multilingualism in Society across the Lifespan, University of Oslo, Oslo, Norway, 4 September 2019. (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2 . 発表標題 A discourse-pragmatic perspective on nativisation in adolescent Palauan English.
3 . 学会等名 Keynote lecture at English in Contact. Kyushyu University, Fukuoka, Japan. 28-29 March 2019. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko, Akiko Okumura, Flavia Feijjo, Marco Fonseca.
2 . 発表標題 The genesis of Brazilian Portuguese as a migrant koine in Japan: Language and dialect contact, and the feature pool.
3 . 学会等名 Invited lecture at 20th Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages. Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, Japan, 28 February - 1 March 2019. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Remote islanders are savage 'cos they eat sashimi without soy sauce: Contact-induced borrowings in the domain of food in Palauan.
3 . 学会等名 Plenary lecture at Studies of Paradise: Where Language Meets Culture in the Pacific. University of Bern, Bern, Switzerland. 9-10 March 2017. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Britain, David, Kazuko Matsumoto, Dominique Buerki, Tobias Leonhardt, Sara Lynch and Laura Mettler.
2 . 発表標題 English in Paradise? Challenges, opportunities and early results from work on new Englishes in Micronesia.
3 . 学会等名 Invited lecture at Leiden University Centre for Linguistics Colloquium. University of Leiden, the Netherlands. 1 April 2016. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 A combined trend and panel study of dialect and language contact and obsolescence: Evidence from transplanted Japanese as a colonial koine in the Pacific.
3 . 学会等名 “ Panel research: Methodological challenges, practices and ways forward ” (organised by I. Buchstaller and K. V. Meaman), Methods in Dialectology XVII, Johannes Gutenberg-University Mainz, Germany. (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 Moribund postcolonial Japanese in the Pacific: A panel study of language obsolescence.
3 . 学会等名 Panel “ New avenues in panel research ” (organised by Karen V. Beaman and Isabelle Buchstaller), Sociolinguistics Symposium 23. The University of Hong Kong, Hong Kong, China. (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Fajst, Valeriya, Kazuko Matsumoto and Sachi Yoshida.
2 . 発表標題 Korean loanwords in Sakhalin: Semantic and orthographic variation, Russianization and dialectal features.
3 . 学会等名 Sociolinguistics Symposium 23. The University of Hong Kong, Hong Kong, China. (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Kaneda, Eko and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Dialect contact in a diaspora German speech community in Japan: Speech accommodation in the German school.
3 . 学会等名 Sociolinguistics Symposium 23. The University of Hong Kong, Hong Kong, China. (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko and Akiko Okumura.
2. 発表標題 Nikkei Brazilians on the move: Brazilian Portuguese as an immigrant koine in Japan.
3. 学会等名 NWAV-Asia Pacific 6. National University of Singapore, Singapore, February 19-22, 2021. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fajst, Valeriya, Kazuko Matsumoto and Sachi Yoshida.
2. 発表標題 Kimchi or Chimchi: Korean dialects in contact and Russianization of Korean loanwords in Sakhalin.
3. 学会等名 NWAV-Asia Pacific 6. National University of Singapore, Singapore, February 19-22, 2021. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kaneda, Eko and Kazuko Matsumoto.
2. 発表標題 German dialect contact in the German School in Japan: Speech accommodation and second dialect acquisition.
3. 学会等名 NWAV-Asia Pacific 6. National University of Singapore, Singapore, February 19-22, 2021. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本和子・奥村晶子
2. 発表標題 コイナー化における社会的意味と社会階層の役割 日本のブラジルポルトガル語変種の事例
3. 学会等名 第44社会言語科学会研究大会. 同志社大学. 2020年3月5日-7日.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田さち・松本和子・金廷姫
2. 発表標題 在日コリアン二世の方言接触 首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から
3. 学会等名 第44社会言語科学会研究大会・同志社大学・2020年3月5日-7日.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本和子・奥村晶子
2. 発表標題 在日ブラジル人コミュニティにおける方言混合とコイネー形成
3. 学会等名 日本地理言語学会第一回大会・青山学院大学・東京・2019年10月4日-6日.(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金田懐子・松本和子
2. 発表標題 横浜ドイツ人学校におけるドイツ語の方言接触 スピーチ・アコモデーション理論の検証
3. 学会等名 日本地理言語学会第一回大会・青山学院大学・東京・2019年10月3日-6日.(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2. 発表標題 Substrate influence versus SLA: the case of -t/d deletion in Palauan English.
3. 学会等名 International Workshop on the Challenges of Linguistic Diversity: Its Social, Anthropological, and Structural Aspects. University of Bern, Bern, Switzerland, 24-25 September 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田さち・金廷姫・松本和子
2. 発表標題 在日コリアンの方言接触 慶尚道二世の予備調査
3. 学会等名 第22回東京移民言語フォーラム・東京大学・2019年7月27日.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金 廷姫・吉田 さち・松本 和子
2. 発表標題 在日コリアンの方言接触 慶尚道二世の事例研究
3. 学会等名 第21回東京大学言語変異・変化研究会(UTLVC21@Komaba)・東京大学・2019年7月21日.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko, Akiko Okumura, Flavia Feijjo and Marco Fonseca.
2. 発表標題 On the emergence of Brazilian Portuguese as a migrant koine in Japan.
3. 学会等名 “Debates in Sociolinguistics” (organised by Raquel Freitag and Livia Oushiro). 50th Anniversary Meeting of the Brazilian Linguistics Association (ABRALIN). Maceio, Alagoas, Brazil, 2-9 May 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 エフセンコワレーリャ・松本和子
2. 発表標題 サハリンの言語接触 サハリンのロシア語における日本語・韓国語からの借用語
3. 学会等名 第19回東京大学言語変異・変化研究会(UTLVC19@Komaba)・東京大学・2019年2月22日.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Evseenko, Valeriya and Kazuko Matsumoto.
2. 発表標題 Language contact in Sakhalin: Japanese and Korean loanwords in the Russian language.
3. 学会等名 20th Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages. Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, Japan, 28 February - 1 March 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本和子・フェイジョーフラビア・奥村晶子・フォンセカマルコ
2. 発表標題 ブラジル移民のコイネー形成 創始者効果と方言接触理論の検証
3. 学会等名 第43回研究大会社会言語科学会. 筑波大学, 筑波. 2019年3月16-17日.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko, Flavia Feijjo, Akiko Okumura, Marco Fonseca.
2. 発表標題 Language and dialect contact: Bilingualism and koineization among a Brazilian community in Japan.
3. 学会等名 Japan-Latin America Academic Conference 2018. Nikko, Japan, 25-28 September 2018. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2. 発表標題 Ollei I 'm picky cherrang with a girl I like cherrang: Nativisation of a newly emerging postcolonial English variety.
3. 学会等名 Sociolinguistics Symposium 22. University of Auckland, Auckland, New Zealand. 27-30 June 2018. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Japanese on the menu: Language contact and food-related borrowings in Palauan.
3 . 学会等名 Sociolinguistics Symposium 22. University of Auckland, Auckland, New Zealand. 27-30 June 2018. (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Why not take your kids to your fieldwork? Pros and cons of conducting field research with kids.
3 . 学会等名 “ Narratives of Motherhood ” (organised by Kellie Goncalves and Elizabeth Lanza), Sociolinguistics Symposium 22. University of Auckland, Auckland, New Zealand. 27-30 June 2018. (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Changing views of bilingualism in the Pacific: A restudy of postcolonial multilingual Palau after two decades.
3 . 学会等名 Linguapax Asia. Tsukuba University, Tsukuba, Japan. 23 June 2018. (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Speaking “ Palish ” ? Social embedding of linguistic change in progress.
3 . 学会等名 Studies of Paradise: Where Language Meets Culture in the Pacific. University of Bern, Bern, Switzerland. 9-10 March 2017. (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Social embedding of linguistic change in adolescent Palauan English.
3 . 学会等名 Methods in Dialectology XVI. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan. 7-11 August 2017. (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Britain, David, Kazuko Matsumoto, Preparat Promparakorn.
2 . 発表標題 Dialect contact, new dialect formation and koineisation: Three rural case studies from England, Palau and Thailand.
3 . 学会等名 1st International Conference on Koine, Koines and the Formation of Standard Modern Greek. Aristotle University of Thessaloniki, Thessaloniki, Greece. 3-4 November 2017. (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 David Britain, Dominique Buerki, Tobias Leonhardt, Sara Lynch, Laura Mettler, Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 English in las Islas de los Garbanzos: Developing a multi-locality corpus of Micronesian Englishes.
3 . 学会等名 8th International Conference on Corpus Linguistics. University of Malaga, Malaga, Spain. 2-4 March 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 The actuation of innovation and obsolescence of the tags sho, desho and daro: Evidence from a postcolonial variety of Japanese in the Pacific.
3 . 学会等名 NWAV-Asia Pacific 4. National Chung Cheng University, Chiayi, Taiwan. 22-24 April 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 The interaction of substrate and superstrate variation: The case of (d) in Palauan English.
3 . 学会等名 NWAV-Asia Pacific 4. National Chung Cheng University, Chiayi, Taiwan. 22-24 April 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 Dream goal. If I have the brain ollei, I want to be a lawyer. Nativisation of a newly emerging postcolonial English variety in Palau.
3 . 学会等名 Discourse-Pragmatic Variation & Change 3. University of Ottawa, Ottawa, Canada. 4-6 May 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 The vernacularity of Palauan Japanese.
3 . 学会等名 Colloquium "Language Variation in the Pacific" (organised by David Britain and Kazuko Matsumoto). Sociolinguistics Symposium 21. University of Murcia, Murcia, Spain. 15-18 June, 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Variable substrate influence on Palauan English phonology.
3 . 学会等名 Colloquium "Language Variation in the Pacific" (organised by David Britain and Kazuko Matsumoto). Sociolinguistics Symposium 21. University of Murcia, Murcia, Spain. 15-18 June 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 (d) in Palauan English: Variability shaped by the substrate.
3 . 学会等名 Workshop on Pacific Englishes. University of Freiburg, Freiburg, Germany. 27 June 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2 . 発表標題 Ollei, I was too drunk ollei... Lucky I did not hit someone: Nativisation of a newly emerging postcolonial English variety in Palau.
3 . 学会等名 NWAV 45. Simon Fraser University and the University of Victoria, Vancouver, Canada. 3-6 November 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Substrate effects on -t/d deletion: The case of Palauan English.
3 . 学会等名 NWAV 45. Simon Fraser University and the University of Victoria, Vancouver, Canada. 3-6 November 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1 . 発表者名 Tokumasu, Naomi and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Heritage language acquisition among Mexico-born Japanese descendants.
3 . 学会等名 Pacific Second Language Research Forum 2016. Chuo University, Tokyo, Japan. 9-11 November 2016. (国際学会)
4 . 発表年 2016年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 D. Britain, K. Matsumoto, D. Buerki, T. Leonhardt and S. Lynch (eds).	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Berlin: De Gruyter Mouton.	5. 総ページ数 300
3. 書名 Micronesian Englishes (Dialects of English).	
1. 著者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Berlin: De Gruyter Mouton.	5. 総ページ数 300
3. 書名 "English in the Republic of Palau". In D. Britain, K. Matsumoto, D. Buerki, T. Leonhardt and S. Lynch (eds). Micronesian Englishes (Dialects of English). Chapter 3.	
1. 著者名 D. Britain, K. Matsumoto, D. Buerki, T. Leonhardt and S. Lynch.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Berlin: De Gruyter Mouton.	5. 総ページ数 300
3. 書名 "Introduction". In D. Britain, K. Matsumoto, D. Buerki, T. Leonhardt and S. Lynch (eds). Micronesian Englishes (Dialects of English). Chapter 1.	
1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Oxford: Oxford University Press.	5. 総ページ数 印刷中.
3. 書名 "Japanese in the world: The diaspora communities". In John Maher (ed.), Languages and Communities of Japan. Chapter 1.	

1 . 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 London: Routledge.	5 . 総ページ数 584
3 . 書名 "The contact varieties of Japan and the North-West Pacific". In U. Ansaldo and M. Meyerhoff (eds.), Routledge Handbook of Pidgin and Creole Languages (Routledge Handbooks in Linguistics). Chapter 6.	

1 . 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Berlin: Peter Lang.	5 . 総ページ数 296
3 . 書名 "Nativisation in adolescent Palauan English: A discourse-pragmatic perspective". In Y. Asahi (ed.), Proceedings of Methods XVI: Papers from the Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology, 2017. (Bamberg Studies in English Linguistics 59). Pp. 75-82.	

1 . 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4 . 発行年 2019年
2 . 出版社 London: Routledge.	5 . 総ページ数 464
3 . 書名 "Language variation and change". In P. Heinrich and Y. Ohara (eds.), Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics (Routledge Handbooks in Linguistics). Pp. 199-217.	

1 . 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.	4 . 発行年 2019年
2 . 出版社 London: Palgrave Macmillan.	5 . 総ページ数 211
3 . 書名 "Pancakes stuffed with sweet bean paste: Food-related lexical borrowings as indicators of the intensity of language contact in the Pacific". In G. Balirano and S. Guzzo (eds.), Food across Cultures: Linguistic Insights in Transcultural Tastes. Pp. 127-167.	

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 発行年 2016年
2. 出版社 Berlin: De Gruyter Mouton.	5. 総ページ数 273
3. 書名 "The role of domain and face-to-face contact in borrowing: The case from the postcolonial multilingual island of Palau". In D. Schmidt-Brucken, S. Schuster, M. Wienberg (eds.), Aspects of Postcolonial Linguistics: Current Perspectives and New Approaches. (Colonial and Postcolonial Linguistics 9). Pp. 129-151.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Palauan Japanese Project http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~kmatsu/research.html</p> <p>Palauan English Project http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~kmatsu/research.html</p> <p>Multilingual Palau Project http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~kmatsu/research.html</p> <p>パラオ日本語プロジェクト http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~kmatsu/jp/research.html</p> <p>パラオ英語プロジェクト http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~kmatsu/jp/research.html</p> <p>多言語社会パラオプロジェクト http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~kmatsu/jp/research.html</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ブリテン デイビット (Britain David)	ベルン大学・Department of English・Professor	
研究協力者	奥村 晶子 (Okumura Akiko)	東京大学大学院・総合文化研究科・学術支援職員 (12601)	
研究協力者	吉田 さち (Yoshida Sachi) (10587786)	跡見学園女子大学・文学部・講師 (32401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	フェイスト ワレーリヤ (Fajst Valeriya)	東京大学大学院・総合文化研究科・大学院生 (12601)	
研究協力者	金田 懐子 (Kaneda Eko)	東京大学・教養学部・学部生 (12601)	
研究協力者	徳増 直美 (Tokumasu Naomi)	東京大学大学院・総合文化研究科・大学院生 (12601)	
研究協力者	フェイジョー フラビア (Feijo Flavia)	東京大学大学院・総合文化研究科・大学院生 (12601)	
研究協力者	金 廷姫 (Kim Jeonghee)	東京大学大学院・総合文化研究科・研究生 (12601)	